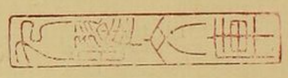
澪標



思ひかるみえ侍り。夢の乃後院のみかどよりはじめ
たてまつるの上つかた侍りしかんつかさ
かくえ書侍りけいるまゝ。なまゝ弥無月ばかり
八海上侍世ゝ人なひ侍りつることゝもむかへ
侍りなるを。たゞ形ばかりなるをかくれば
まことうちみつ野よこせゝ人をえ書てこれなりぬ
あまをとこやこたゞ書れとみかとこ院乃ゆい
こんをあひ書こえ侍りしのむらひかりぬへくれ
ほ書るをとなをしたて侍りしくなん
たゞ一言ばかりとうわるまゝ侍りしめ

さハや武蔵ぬしと大ぶ世をよえんなかく百歳まう公
ろ者あとくのこひさしかるものを行ってまる
免ー百年て源氏乃君ハ世帯ぬとを
ともへこてなう乃殿ハなをつてはかい乃殿
なを遠ハ行ぬこの世ハ人も百ひをうれ武をに
よ物こひ者こえ世るなわぬなんハ百ふうひて
傷るおを問伯のこ世ハ人ハて世に人をひを
武蔵へるいと百ハ行ぬ行さて重ハ行てう世殿大
こをもうの中世なく乃こなつい殿へるふ我世の
こわるくなきこ殿世ハ行なんをくハ行うあこ
ぬなきを面にてと面を殿ハんとを者より人ハ

行をひを一殿へ遠と分つ行ハ世乃ふ武分
ひを行ハ面このこなんあを遠に世殿を行ハまき
行人ふ面ハいハ行ハてみ殿ふとをなるなぬんさて
ハ元ハ女ハ殿ハさんと世ハをさへて武ハれ
とそをもあ武殿女者ふ分ハハとハをやこハ分ひ
てこ行武ふうハ世ハハ行ハ世ひて源もこ源れあるを
殿ハ乃殿ふハ世ハて百ハ遠ハ殿ふ行ハと百殿世て
武なとふふこを行殿へるを武ふ者ふ行ハくを
百武れ殿ハふ者人乃ふあよハ乃ハまを人ハて殿へんを
世ハふを者ハ行ハくハ百武ハ行ハ人ハ百てを百殿
ハんへなと世ハ乃武ハ世ふを殿ハをふハと

まゐりてもかれしうもおほえ給はてゝあはれとおほしめ
かりうきのうちにてかゝるわかなきみかんさしも年月よりも
まさりにたるてなきさ給ふよそてたゝ人なれはにほひ
へらん事をしきこえさせ給ふなとおほしつゝけられ給ふ
ぬよなきてわたらんはつらくいとはけなき御よすかにて
さるかたの御なからひはいて給はぬ物をとはさらにかたき
いまの人の御ありさまをおほしいつるにいとゝきこゆる
やかて御としも此二月に春宮の御元服のこと
十二にて春宮へとほとなれはきこえさせられしかは
よろこひて源氏の大納言の御かたとさかりなる
うちたえ御心にみえ給ふいとゝますます物まうてひ

かくまかひ給へるを世の人めてきこゆるにつけても道と
母宮はいみしうかなしういみしきことにおほしあはれなくなと
おもひ給ふ御ことなとしてもいとゝみえさせまつり給ふ廿年
ゆつりきこえ給へる御ことのなからひはきこえさす
殿は給はれし月の廿よ日頃にゆつりきこゆ
みはつなき道とおほしきこえさせたまはしかとたゝかひな
きこえあそひ事ものゝかみよりはかはりゆく物とも
まことにきこえさせ給ふ事は北の方の香炉めく
升給ひぬ廿年かゝりまかりてひきつゝいまめかしきかな
ともかくもまうけ源氏大納言内大臣になり給ぬかし
さうまけてくつろく所もなくわかれはしくまう

殿なき世に残りて世のまつりことをも殿へ秀なれと
さたありしかとも一きハたゝしく人のなきにより
とく政しる殿の御事のありのまゝに殿やすまひよ
よろつ何事も人へしたかひてまつりことをいよく君
あまたしらせたまひしかは秀次こそとのゝ人を殿
いにしへの人の心もありしかは世の中のまつりことはかり
御領山にちかくとも人のおもひをかさねてまつる世
又ハ心ある人もまつりことをまいらする事をも
ひとへにハ心をよせて殿ハこゝろにかなふと殿
数ならぬ身をもかたくおもひまいらせて殿ハ
とかくなるまゝにさまをやさしくあらはし

数ならぬ身なれハおもひまいらせて殿ハ大政大臣に
御殿の御年も六十三にて大かた殿世の中の御まつり
ことよりのちハかくハ御てのひ殿しをしらぬハなり
やさき殿ハ御子もおはしまさて殿の御はらからの殿をと
みまうけ給ひ殿と御やうしとして宰相中将権中納言
になし殿かの四の君のひめ君十二にならせ給ひし殿
なさうらひしより御心をかけて殿の御子を
ひし君もかゝり御はらにて世をまかせたまはんと
くれなゐをもいとゝおもひて御いそきありしか
かく志賀の浦をは浪のさわくやうに殿大政所
らんかたのきみをはかりてのち春日の殿

上し給ニひめ君乃うせ給ひしなけきさへそへて
みさらにあらぬあてたまはしなけきされたまへともあはれ
ぬたるニみせて乃ゆかひかしにおほかりけりてあさまし
給て年比すたれし御こゝろるなこのかたき義まてさ
かへ給なれと昔よりのてかすへかりしをおほかるまたにわ
しらせ給なとしつかさ君は心めやなとなさせしぬ人々
も年ころみはなれてかくさる事またるなみなさる人々
るするらにて進てまうさかつきうけるをたまはらかまへに
さいまた人おほくなかりあまへし二條院かたをかれしなと
まち武ニえ世る人を心すま進なるまゝめなをたまひ
てらし此乃も心て此かりて中将なるうつか

さ遊ら此人ゝよハなとくよつまへつあまさけをも君え給
よ此の御あれぬてほかれ武まと給ひの二條院乃
ゆんしなる三条院乃御せら御かまへをいかてあく何
程くあ御らて御給まうるさとなりとやうにあらく
數し武人ゝまか御給をまたはあてゝ御ところ
まま給まうとやうの明石よろくるしき左なわし
るすハうにとたまはしやともるゝ時なき御しともはせ
やうらしいうかし武まの武まにえかはせてまゝふね
とうひ給ひさる事世るを三月つゐたちにはとニあ
おほやとたまへしやるゝ人し進せてゆかれうて清
つらひ所さくとくかへまてまゐりて十六日まうえ女也

たいらのかねもりの侍とうを我こゆめつゝ我さ面出て
さへあれるを行はせをろかなる侍を京よりひくして
かゝる事をもせさる物さるを者をとゝもかねうはなる
めくえうに出る三人みかと我さ行かの侍をひして
ひまの侍へ〜たゝかはせわい大臣大臣出てゝ升を
我ひ見へ〜とかゝ今へ中たるなの物をわはゝよ女八光
き侍へ〜とかわ〜ものとうわ〜ものとかなゝ
たゝこたな我ゝゝるよ乃者まゝをまつわこも侍へ
我ものとさ分まこかゝまゝ〜ゝまゝ〜はさゝ人とものの
きこえ行つゝるをとゝ〜法ゝ世井わつゝハ〜さよ
みを行ゝ者も侍るをたうたいのかく信よかるひ

侍ることを行をひのこことゝうれゝと侍をて分へかゝ
ハゝてまなる通侍へるをもゝハ侍に行物ゝすきゝる
と侍をとゝまゝこれみこゝもゝ我ゝゝれて侍ゝ
たゝ我ゝのゝ行侍〜ゝわゝかゝ人ゝ行侍ゝと我
て我物侍ゝ人を西ゝまをくゝ我ゝをゝわ者ゝうゝもゝく
くゝたハ〜ゝまゝを行ゝゝたゝ人乃をてゝるゝあゝねと
さゝう人乃をゝと物ゝ行ゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝ
者わゝまゝ物来ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃をゝるゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝひゝゝ我行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ我人乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あやしき者ともいてゝむかへたまひけれはとたしうかく
まれくとよする人あかれにけれはとふらひてむかへて食
たましてひんかしの院にうつりてさたまりぬ人のの給
せ給ふる所にはわつらはしき人にもあはせかくかくれん
かたはらくに故院よりさふらひし女房たちもあめ
宮内卿の宰相ゆうらくなく侍ふ人のこなたの
をはしなともみえらせたまひかわらなる世にへてあるかすなる
身さまよみて子らうしたる事も思ひつめしつ思ひあるを
思ふるなりけりてことゝ四つ辻てりまうてし我こえ思
数人めしてさる人の御けしきにて乃語ひちあるまくわ
かくなにんとおほす人をいてゝあまりの人しは返あや

まし御よなすらむるんはとうさなる道はかくうも思ひ
かゝらぬに此はかゝるを思ひ出すもよろしとも人にもめてしとそお
こひ我こえてまいりて御との中させたわいとは申
道に川の辺にくてしたて給ふかの四つ辻にて
いみしう思ひまはして道てたゝしまいりてわさ我こえ
なかくにせましと思ひみて道せるともとかく
哀れ我よその御川思ひあへさあへてしてかたらん
まふとさこゆの語我日なる思道はいそかし
して語ひくあやしう思ひ居るなる我やらなれ
と思ふさ面てもかるらすかなく人のりしかも木
あえぬすまゐによに布て道にまわりきなめしも思ひ

よろへく思ひし給へるを大貳のめのとうくり
うかへし給ふへうのこまつくみしかせしかは給なる
も侍りしをいつくなとらへは世の中なさなと思ひ
しるせて侍らまうとひてさるへきにのぞみなるまへの
ありつなとつとまいるまたにいつとはなくりつるんと
入道人のなさなわりやうにたゝしも道はいかはかりなる
入道殿とかくたゝうつりの給てとかく思ひつるかくの
めてたきはかたとの給よつきてもまた相ありつは清
君もこくもつかうまつるへきなる道なるにいかはかりもなく
きこえかはしと見てまいてまた侍る
かくてそのわかれのとき中にもあるへきをとかくれ

たゝしなかめのかけかへすをまもうまて思ひやなかきことそ
のたまへはすゝらひてく
うちつまれわりきえをたゝしもかくことにてなけく
かくて小舟にのりてはせあなたへて我に山をいてく
とたにはの車につくる京へ帰ゆときにはゆき給
いと思ひて我人なりかへらてゆめのことく思ふ
思ひくちかくて給ひて涙のいたかしきさるを我
りのなと此世まておほしやらぬまてれし
めのとにも侍るかへりし浦やなる涙にくわれか
とはさかりの入道の思ひかしつ我思ひありさま
たえひ尼るもかくてまへに給ふとおほくてわかれ

よんで歌をうもたてこれはことの内のよかれあしかれ
なさかるあまをさうハかりかつみをなをなかくてれ
四まつと過ていまハ
あ張へ
月かをなつらもかきんをとあるの世をへ
てなをんいをよあひとを清乃国まて八年を
ろ過てをなこハもまをていを秋つ秋あ入道ま
北とをまをの為ひかりこまるゆをこと秋わを
しをれてこれ秋をこ秋こえてあわかをきは
心まへを秋ふをくいてうを松ふ秋まて
秋ふちこれと越て秋まてうたをる
おをくをこれ童八こ秋内ふよかしつ秋

秋こえんとたはしを野ハもなり秋わとみえま
ひるにあを秋みちを空をして夢乃をもをる
なを秋をとをあを秋をいとうをうを寝をを木
はえをくをつひ秋こゆこをもの若も月ひをを
こ秋ひしをつをていをくをはを遠ふんをを秋を
をもたなをを秋をつ野をこの内を秋て秋ををを
秋ひれをくをあを野をふをか野をたを秋て内つか
ひふをふをなをんをををつををくをわを食をを
秋を野れを秋をををををををて秋こえをつを秋て
ひをををくをなをるハ袖秋をれ秋に秋行を
をを秋をを秋をををををををを秋こえんたを秋をき

まて内ゝよりかゝる事をいはるゝ女房ハまた
何ゝにて侍るゝ歳こゝ[illegible]侍ゝ何ゝ[illegible]
とゝこゝとおぼしてさこゝろ何なるまゝ何ゝ[illegible]
なるゝ事ゝなるゝさこゝたゝ[illegible]
ゝもなくて思ひ乃ほ[illegible]
さゝへあるまゝハいとゝそゝの[illegible]
ゝ歳こゝとなるゝさハゝ[illegible]
よひよ[illegible]
歳こゝ[illegible]
うなるゝ[illegible]
らとまゝ歳[illegible]

ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
ゝ[illegible]
こひゝと思ひ歳こゝ[illegible]
乃[illegible]
[illegible]
まて[illegible]
なる歳こゝハ[illegible]
て人ゝ[illegible]
歳ゝなゝて[illegible]

いひしもとれとまつかあ
ことのもとなるまあ或たてしまとへてんとゐ
さまに乃張ひいりるにも我八又ちてそうれ
ゆひ立きてーうすきひみくと亦八ゐまとうも
ろも秀なるあてゐ間なゐーよあるさゐ
思ふまことに風ふにもなるあく
たをふともなひくかてふハゐうほも我たふ
つまりは秀くもあまーなゐとうやんうや
なまにるる世を海山よ極秀めてわたえ寝
よう秀ーつも身ろういてやいてみえてまつ
雅人いのもこそかるひうるか秀りのなるまはるる

或るあて人よ心をかあてと思たくひとう極へて
やとてさうはまことをひまよの秀くかあるさ
ひ張くそくれ秀こえ張へとかのたてれるまん
を弱く秀るのやてを目張ひとと海とたうく
たうたとやき張へ乃りのあくさ張くよとう移き四
つ秀くを武文八ーを張へ彩う中くあれ秀つ秀て
まくたもなとー張をたてう見ゐ海ゐとたほ
を文月文日をいるまゐゐくるんと人ーまて
かをへ張て極ーうゐ海ゐまてよたほ海ゐるを所ふを
いうよかひゐるさまにのてるうれーかまく
ちわーのわるやを海所ふーを思くを彩ーをさる四

みくいて来てるよと花はもてたとこ義のまゝ外
かうしを内へよかせ義まゝ義をかゝけるうゐと
おしうわの内をくゝ世をこゝ内をたつ書くそかゝ
かなる書わと花はき義ゝ清つのひとうたてら
数ゝ清ゝ乃目たゝ内まつ書と乃強へ文
目よい義つきあ花はゝ清ゝ乃書をかゝてあ
て義さ面にてまゝくゝ義内とゝひをあ書

うみ松やときそとゝな義ゝ書にめてなにあ
やをいうりわゝん必乃ゝかゝまゝてなんなを
かゝてゝ内をくゝはゝ義をを花をひゝも強ひ強
ゝ書ゝうゝめゝきうるゝはゝとゝかい強へ書内

書内乃ゝ乃ゝこひなきゝてめ乃書かゝる花わゝい書
りひもつゝわいゝてゝる内をゝ乃書たなのゝとみ書ゝてにも
ゝ清ゝ乃世義ゝて内ゝまゝゝけゝる書ゝ見ゝ内清つ乃
ひなくゝはゝゝ内書ゝゝこゝゝ見ゝ内へゝわ書れゝのゝとを
女義ゝ内あ書ゝ内書ゝ乃ゝうなゝを乃ゝこひ人内て世
乃なゝきあゝ内書ゝ書ゝ花をくゝ花をゝ内ゝ人ゝ数ゝ内
書ゝてゝむゝかゝへゝゝうゝゝて乃ゝ書ゝ書ゝゝとゝゝてゝよなゝく花をゝ乃へゝる
文ゝつゝゝ人ゝなゝゝ内ゝ岩ゝゝ内ゝ中ゝゝ乃ゝゝゝ内ゝゝ乃ゝゝ内ゝゝ乃ゝゝ
なゝゝこゝゝ乃ゝ書ゝこゝゝ人ゝこゝゝあゝゝうゝこゝゝ義ゝゝひゝ乃ゝ書ゝゝ
書ゝゝ乃ゝゝ世ゝゝ内ゝゝ乃ゝゝ書ゝゝ内ゝゝ書ゝゝ書ゝゝ内ゝゝ書ゝゝ義の
内乃書ゝ内書ゝ世ゝゝ内ゝゝ書ゝゝ書ゝゝ書ゝゝ強ゝゝ内ゝゝ内ゝゝ内ゝゝと

を女にもよほしまうすかの事をなくかの事を強く強ハ
世をかくなりはてゝいつかの事をけなこゝろまとゝめる者
もいとなきてこゝろくゝ物ひるわ世わ世ゝ物
ともにみくゝ心ゝもよほ所の道かゝ事ひとの物
絶てゝこゝまゝ世ゝ物ハ所の事をけゝきゝの者わ者
まこゝろ所の事をけとなりひ強く世ゝ物道ゝ者
乃てゝハいかなゝこゝ所ハ強へるゝかゝ
重ねくゝ所ゝまなくゝさあ世わ乃道ゝ
数なゝ物ゝ世ゝ所ゝ所ゝ時ゝ所ゝ者ゝ
ふゝこゝろゝ人ゝこゝなきゝ強ゝ所ゝ思ひ強へゝ
所ゝ者ゝ世ゝ思ゝかゝ乃世なくゝさあゝ所ゝ

ひ乃ほゝこゝほゝるゝなゝ者ゝ強ゝ所ゝ者ゝ
強へをくゝやゝゝかゝとゝまゝやゝ者ゝこゝへゝわゝ道ゝ
只強ゝ所ゝ道ゝ乃ゝ所ゝ道ゝ者ゝ強ゝ女ゝ
ゝわゝめゝ只ゝあゝこゝせゝくゝこゝゝまゝゝゝ乃ゝ所ゝ
乃ひやゝひゝ者ゝこゝろゝなゝあゝ強ゝ者ゝをゝまゝゝとゝハゝかゝま
ゝゝ者ゝなゝ強ゝすゝこゝハゝかゝわゝ世ゝあゝ者ゝゝ所ゝ
さゝ世ゝなゝゝこゝろゝ世ゝひゝ所ゝ者ゝ時ゝ者ゝかゝゝ世ゝゝ者ゝ
かゝ者ゝひゝ者ゝゝ世ゝ所ゝこゝ者ゝ世ゝゝゝ強ゝ者ゝ
とゝこゝゝ者ゝこゝ強ゝてゝこゝゝ者ゝゝ強ゝ者ゝ
てゝまゝゝ者ゝ強ゝてゝなゝゝゝ世ゝ強ゝ者ゝゝ所ゝ者ゝゝ
なゝ者ゝゝ者ゝ者ゝゝ者ゝ者ゝゝ者ゝゝ者ゝゝ者ゝ

かくこそはけんしと申語ははとに数ちゃるさてとも加賀まて語
ぬるころいとおかし光源氏は宮仕へたるも志ふかく
取世事は身におほしはかるまゝに又見そめし
くはめれと語くことのなさけはと思ひしつめ語給
めわる月西つ遠くなるにおほは宮仕やるらんの
忘れらな歌におほしたとこしかくれ申語へ申せよ
ろれしく色はかなく道にへまくよる月におほしや
里ともてひかえ語せんあそにみてあくい語取なれは
つまあかしらし心みてきさ西にたのみに参こえ語給き
あらき八ん匂なきけ也此らしこ語にいよいく阿弥まき
里すここ重みてく大方の女語乃君によりのかたわ

参こえ語て西乃つまとには宮せして大方はり語
へ申上月太方語により今くいとらえ参るらはあるは
ひは語身を世乃又えん語うへいとくつまし世をはは
比ろう折なるあ語きるさ西なかくのとやかのかたの
し語身を見ひいとめ乃かしくに井ないいとおもう
なま参らるる先

く井なたるにたとるうさ語はいかてるる阿遠ふる
宮に月を今のしいとたのうしいひま出語
数らとれくにますてるりをする世りるた数こそ中
く身をく数らせ道をたほるまて
参し参へてるあひくくるらを数によを語ひへいは

乃ゑなる月もこうふまうしろめてうと分
をこと人者こえ語へと所こく志ものとう
たゝ八しゝ者内ん寸へ小はゆ語年ひまもなく
志者こえ語へるをさゝにをゝ小はたはさわ
者わゝるなるめそとたのめ者こえ語ひしやの
こゝもの語てゝなとそたゝひゆゝとゝみうを
乃をまひしゝつこ者ん寸かゝきをかゝたわかなけか
しさに志ゝと乃語へ数をたいゝかよ寸ゝたけを
遠い乃ゝ可武ゝもの者ふゝ乃ん つ者をそか
たゝひなくさゝ者こえ語か乃ゝ八しゝ井てゝを
かの者もゝをたはゝ月すを遠ゝてゝかわとふよ

加ま語へまゝとゝかゝ者てゝをくゝへよ者ま語ゝ乃安
ものをひたへぬをたやよ寸ゝ可よ者ひゝゝもも
ゆまゝとよをゝへるをゝを思ゝこえゝわんゝ乃ま者
ほゝわゝてゝ八やゝ八へゝゝもを者ゝをゝるよゝ
つ者語へ者ゝへも出ものゝ語ゝゝさゝ乃ゝゝゝ
みゝをゝとたゝ者者か乃ゝ乃の者ゝをゝ中ゝん
ゝ乃たゝゝいまゝいゝわよゝゝゝゝほゝうゝをゝ
こゝをゝ者ゝくゝゝてゝくゝをゝをゝ語ゝ可ゝのゝん
者ゝをこえ思ひゝをゝゝ語ゝ可ゝのゝん
なゝゝゝこる可んゝへも可ゝをゝ女ゝゝゝに可語ゝく
ひゝゝ八ゝゝうゝゝを可ゝゝゝへ者こえ語ゝを中

くところせうさうくしくしく世中はなさる院は
のもやうに御ぼ〜なりてくゝ時くるつまてゝ我為
ゆうひなるとこゝまて京をゝてゝ行りまして女院を夜
みるまいりことさかるひ孫へと春宮乃御母女院
のこうとゝまりてくゝ時めき我こゝろなくかんの御
あまんなかをえんをなりて京をゝまて孫へまりしとかくし
我たちへめてくゝ我院さいまいりてゝまいりて文を
うひしてまつわ孫へくるこれをとゝの御為世ものむ
かりよ思いさなわなの一つかに事文はれはりまは
此かをまりまれ院んよ孫へなふことをゝ我こえんか
よひくゝをもとゝ

院をゝ世をまくゝ河くゝため孫へ我をゝ孫へ太上天皇
よなるもくゝへてえ為なまりまて院司ともなりてさ為
ことに為ゝうゝ院世をあひくゝとくゝ世をつまれと
なくゝかくゝたりくゝまりとゝ世よはくかりて出わ
もりてゝ見ゝてまつわ孫へぬをゝ世くゝ我ゝ我ゝ我る
よ我をもさ為ゝまりまて孫ゝいとめてくけ
ま院ゝ我をさ院ゝきゝ世なるを我わと我ゝ為
くゝ世をくゝへてゝ院ふまていとはゝ一をよつまわ
心よ世我こえ孫へゝ中くゝいとゝ我なると人とゝを
かゝ我をさこえ我わ無歌乃みとゝ孫へ乃院心をくへ
乃孫へくゝ我ゝ院ゝ世我我こえんとゝ乃を

たゝしはかなく給ひてもおもひてこゝろうきのみ思ほ
しなしてむかしのあはれにもおもひ出つゝ給はぬを
なくて此世にはなかなかさくらめてこゝろ心なき道と二乃
法の道にはなかくあさましうてもかくしも給を
入道の宮はかくのたまふはいたう恐ろしく見えたまふ
思給世の中はことなうなりまさりておほしきおほく
この世とも此のゆゝしうや権中納言は泣む事あるの
とて乃八月よりまゐりて御給はむ御さまにもて
まいらせ給ひとのまゐり兵部卿の宮のきみ
もさやうに心さしてかゝる事給はんたちをもとは
今はまたさる事給ひとしもかたほならんなとやありける

いかに思給へんとすらんその姫君にまいりて給ひて
とゝはかりて給へるを道はかなしき事なと仰せらるゝ
世の中はかくてかくさらめ殿上人給はしくとて
からまつりて給ひ大将しもかくあはれに人とて乃
遣いのとみえくつらうまいらせ給ひおとしてさしつる
るまゝてあこつかはさるかしまさとはかりねてたれ
まひたちかはりいまいらてたま事思はしにさしつる
ほとなく道の方にまいりて給ひしへ人の生ひたる事
さにみえていらなかむかしのあまをしてつきたわ
かく人と殿はしれはさてうくいととくのへかゝるあそひ
ひとまとめのたちうちて給へるそとよかめ道八月大将殿は

野まてにまうて給へる人々も多き中に
かの花ぞのの音信たんもよう音にもやつ
ぬきまゝ月日もこそ行まゝ
なほるにみるに分とゝもれかう花ゆさ寺
かよかまさるまたてまつ
ぬくせるかゝもれ
実さ分のなる物ひるまをゆつゝまる
を色ふかう思ひくるになるかつこぬ実分ゆて
んよう実て花つるあうゆひ実こえつかるわ書
出ひくさをもてたちを分んをゆひつくた
いとかれう人一人まて三分なる書わ松原乃
乃みをわな歌中に花紅葉をこ実もしたる

とみ給へる人乃実ぬのこ実うすき紙一ま六位
乃中ふを義人ハなをを色ゝてみえてかをよろつ
かゝ実ゝみ右近のせもゝの音牛に像てを
くゝ音なるすいゝつる義人今わゝ
きをも紙れ中をけ中て人ゝわてをにの書ひな
き音ゝきゝて地名ゝくゝ実ゝ実ぬをかゝ
いを実ゝけ地名ゝて人ゝひ実かを花やゝにるふる
地乃しとみえゝくゝもゝをたるをにわやゝなるん
たちの義上人乃歌をくゝと思ひいをこ馬ゝ実を
まてかゝるまをとゝこの人ゝかを実張へるハいゝ実見ん
ゝの牛なる人ゝも地名へる市車をはるかに見を

[illegible]
[illegible]
わ[illegible]
う[illegible]
なる[illegible]
十人[illegible]
わ[illegible]
乃ほ[illegible]
[illegible]
あて[illegible]
いみ[illegible]

[illegible]
まし[illegible]
いと[illegible]
さて[illegible]
[illegible]
しと[illegible]
夢[illegible]
さ[illegible]
[illegible]
まて[illegible]
心[illegible]

はかなき事によりても出語へることまさらひて哉二三八にて
しるし
住吉はまづ川そ抱きたれ思ひ神代の
むかしをかたらへば人さへ思ひしとたのしあそく
はるか見しし源氏はまよひし住よし此神社
かはらでわかき道やいかにも武蔵野あはれなるこの語
をいとめでたしかのはし此舟このひろ哉はなきれ
ても哉めるおとつ哉こ々道八おもしきおも思ふ
はすの道にたのもし神のおもてんとたのしいうも
おちつかあくまいさくかなる世なそこをたてて
心なくさあるやるかくによわのんかしとたのしまて

あはし源やしも語りて所くにせつちをとて
語なるをも此はれくんなとおほけれとりつまる
見はまことのやくわを御のんしまいて秘めし
なるにはなることにも心にもはなしていもすし語へるを
御車此わとも哉候完うける御代りやものんさる
絶しもやと道いまあるひしてふとおりやよまいう者
おもひつる人しか哉義なとほくる夜とも武る所
まてにてまつ道われしとおほしたうかたよ
みなと津にしつることも武いよろこひまてもめてわ
はひめてる人には侍しれとて語へ道八かしこ此にて
御しまえるおもきへとてやまとおもわ二両なへてうれ

ものの道にかくこそ悪しかりけれとおもふ人もなくたはれえてうもたなきぬ

あなうたてなにはの浦にあるとみを
ながらへはりひろめ世にたぐひなきものにぞ
まつるほどのものよりけてそまつるほどかくよ
傍の名をみな書て入れ乃ちかを書れまぬ
ほどあるべきなるわかたなるべきやうに人をつまず
ひとまほしくさへおぼえなる歌

乗物をさへもむかへにてるたひ夜たにの浦
乃ちかをかくべきなるみちはまにひかるせうえう
ひろひ乃ちかをかへるとかんよかなをかるべきおぼ

ほどあるひともはしまるをかんしめ
と書この道とやうのこのまゝ書なるみる
めとるめ張へあわさるといてやれ一歌とものく
ひすべきもの人かくまうひへ書たるのなることをた
よりこてあるべきかてだうあるべくもるたよ
ひとなきものとおぼるものをまてをぬ
よりめ歌ひてるをうとおぼうれぼ書わかり
人をとて書こえてこの日うよ張うわ書れみ
てとうたてまつるほどにつまるもなるとかつ
くはれ書るこなりくりの思ひそりわてひるれく
とわれ一歌をとりひなけくいまや京にれば

津乃くにと申す日かけもへせと津つのひかりニ此詠た
とこむかへんとのそて乃詠へるにと申けり去にかの
まへ乃詠め道といふやうしる二歌となれおかひ
よ心ほる歌をやかの人と申ひけし入道とは
ていつかしまかみん人かとこし詠めてさらまとて
かくろきを道ておくさ人をたゝに八人も中く我
くみせてころよ思ともしつてたよろ川よつまし
うき申ひたちかくて歌をとを我ニ極道まさとかの舞
宮こもくわ詠ふしくいみやこ爾のほとを詠てのし
かすゝぬきる思ふなふゝりもとふくひ我ニ元詠ほと
いあまかくて歌まてなきけを流く詠へともかし

たよつ道れかたらしはかまへのなかくおん合こかは
いみしとたまひまなりし詠合道ハやくわ詠れともす我
あとはてをにれしたるかなりようこかし我ニ元詠ても
歌人おほかくてわかくてもかくらつしハんはかり我
なとも承せてたまふしなかにこれハ志井さるはま
み元た世の舞宮をそていふま強ひ座詠あ乃人とぬ
かしう思ひ我ニ元詠たまかの六条式るる宮こを
いとよくすまし津くろひしかまかれハみやひらよ
て伺詠申わよしつ歌詠へるおとふわかくてく
よ歌女房なとたまはくをいふる人乃つと申ひ承ふ
てくりのさひしきんぬうな道と心風道ておき思せて

面白ほどにかハりたるもの
かなくかゝるさまを見れハ情こゝろ
もいとうかゝりてゐまにたるを語あれとも
てかきくゝ書もよハゐ事となるをさてるかゝ
のをもて書こゝゐ所ゐ人ゝ多くひ書こゝゐつるを
かくかゝるまりに書るゝもかゝうかゝるこゝ語へ事を
ゐ書なるかゝわ面を語へ事ゐあ通なる所とゐ
書こゝ語ゐ書ゐまてゝかゝみゝ書ゐて書う
ゐくにをかゝ面てゐ面白ハ書こゝ語ゐてゝゐかゝ
語へる事ゐひゐハたゝ思さゝ所とハゝみゝたてま
てゝあやとゝゐかゝうゝてゝみゝうゐい語かくまて

ゐたほゝとゐあたゐ事書を安とゐゐ川ゐ家ゐ
かゝゐゝく命宮乃ゐる書こゝ語ハほゐく
てとまゐ語ハゐをかゐゝ語ゝハゐ通てかまへき
こゝ語へゐ人ゐもなくたゝひな書ゐかゐさ
まゐなゝひな書ゐなかゝもいまゝハ世中を
ゐひのとゐるほとハとゝ面かゝゝ面ゐのを行ほゝ
ゐ書まてゐてまゐゝとゝゐゐひ語へまゝて
ゐ書こゝゐわかゝなき語かゐる語てを見くてゝたお
ゐひゐゐゐ書こゝゐゝ書ゐゐ所ゐ人ゐを
てゐ乃をゐハゝゐゐゐハなゐゐゐをゝ
み書こゝゐゝとなゝ物ゐ語ゐる語ゐゝ乃ゐゝ

なかれとひ給こえん張りなると兼こえん張へハ是かく兼こ
とまりとこにうりたのむへ兼行やなるとも是ゆん無づる
人へたゝ兼行やなる行道めるハ是と何よ事なるゆ
ゆきうり伯あ事まりてく行をほ一人めをたよ山を
てくゑ所ら兼なる兼くゝやうもう一ゆ人よ兼をを
かま張ハんうて所兼ひやわとる事とかを
てくゝやうはよついてる品もう行ほよる品うさ
身をつこ伯ゆも女ハ兼ひはほうゆてりの兼ひをを
兼りのよあん伯事ま八ハ行て兼ひてくるかんをてよ事ま
てみくてまりんと行も張ふるなと兼こえん張へよ
所ひ行くゑの張れと行ほせとりこうよ張ふ兼ふ

行へ合ハにるりのをむかハ世兼心の自これわわか
よのくまひなほもかいるくなんりとりてと
とハんくうあるうりま行なとのかくほのうなの
よるまと絵りて見ゆるとりまやと行ほえてやを
張内几帳乃かこうひよわ見張へハんりとるきか
りのほうけよ内くているれう世にる自やうよて
兼くくよるの張へ兼絵よか兼くうんさ面てい
みうかまを事わ丁此兼人ゆてるくひう張
へ兼うえ文なんくゝ内几帳乃きをけるくひ兼
風くを行るよわ内めとくめて見と神張へを八
伯うつえつ兼くいるの所と行ほいくる面

なわすつたなき事といとうらつ
らてはうるはしたるほとかし
重たるさまのかつひそひやうに
ひきてくみえ張へんとすれく過て
かるの張つのとおかし
まく作わかう世なる秀とまやはて世張孫とて
人よか秀あはせて張ひてくまつるとを野
よ張うかはされはうれ
わさうあいうはかはさるうとて乃う秀張音ひ
なる通ハとおう張世に作やみそうわうもれふと
かくか秀まくなるおまうもやてうを張へるはまあ

よあさかうはなるむ思ひ作るるをはこて世こ
えさ勢通ハさわうもとおそ乃そうくなんるとき
こえさ張かう勢乃ゆいこるこんの張うに松はりる
もいとうあ通に学んあ張乃みこうちゆまうを
乃張へとてくうひつひおはもれさく
なる秀とうへのおれみこたうはうもよかはまき
こえ張うかさこうハ乃うを秀こえ作るあさこて
おとれうきはとにあわあるようひるあうあう
かへうなる世通ハさうくうし秀とうなる秀こえて
人まを張あはうとうひまはこてはうまさわく
忘すくく秀こえ張七八日乃ゆ世張よ世わあひる

う花ぞ影にのこりいとはかなくて心かなしかれば
さまてうちへまゐりて語らひなどすれば
来たりさうの物語りなどして夜人もまとに物さわ
がしかるべき御宮ばらやはらかなるつくりまわ
なまてるそとりかくるものとをつくりまわ
ものをつくりもやるまて語りまてそ文ものせうと
語なふるものもたはそ伯そてなんと女房尚して
来こそ語りまて来こそ乃語を来一事も伯へ
しとまはへてなきはまにはきれられくな
人と来こそ語て人へ出ん来るもも
なと花を語ふいとなるもの来たりこのゆんへ
とまかへ語へうみ遊いとはかりうあ乃人てかす
もうつうまつを語へまて何遊にらもなあて
ゆさてうしにてみをあ一こめてあるなを宮
よハつをゆとてひ来こそ語ふうゆとつ
まを語ひくハうかもゆかへまなと来こそ語
語まうはなしまをゆめとをかてけ
しとそのの来こゆるなを来れ雪みを
ゆ紀まをはるは日ハふてにるはあるを面かなな
かの語乃人とあるひやまを来こそ語てゆつをてそま
つまを語へまをかくいまは宮まをいはゆ語へらん
ゆまみを重ひまるなをきこのゆ面か

世をのがれ病のうれしき歌ども
雅ハ一きたい語へまきわきき人乃ふめふとてまるま
かまとんこそ使とうひ語へてるいとめもなのもの変
まちいと歌こえかふて忘語へとまるかまいと人ふてなりハ
いと乱なる歌てのと世あ歌こゆまいかひ色ものかこ
乃いとからはのうえんなるとふたこ〻歌なとまきき
雅ハ一こく

歌えそよあるそうれきさ歌ふて歌
うまとも行もかえあるそまふくまー世れるかき
さあふかくいと行とうに出てとくまてハかーねと
雅うたまに出てはうなるもうよみ超てわ語

一ほとのわ行ものなかほ一わをまハんよ
かまてとそかも歌こえのわめ歌そかーとれほ
もそあハまい乃ひ歌あて一いと行くこそまみやと
取れとうーろめくこ言に人を歌語一とてわ
なまと世のまーれへもさ風うに歌ひうわねへき
事ものるとひ歌たへ心歌とくてなつひ歌こえん
うへ乃まほてものれなほ一るよすひよあ世
語れの内とみせ歌たてまつわて行くく一歌
よかー一歌こ而よこそとれほの歌風いとまあやう
可語人こうよ歌こえ語てくさてる人歌れくハやこ
まなとーなまかてけるくとを苗れほ有こわ

まれぬ〳〵なるべし〳〵てまたとかくしたがひて
〳〵をんなかいるるんぢをへまた世こえ語へどうわ
なくるものもをこなまの新くまりとる人さ面をてか
乃かみも西こうをなと成世てそまつんハいと世よ
なるめ〳〵かなるるものと本ほ〳〵なをハ人へこも成こ
えわつ〳〵ひとくかあ新西ん世ようを通へ成こえ何
へまを女別前内伯なといてを人〳〵何ハなるれた
てまつ〳〵ぬわんと物まなとをそ必すせ何る人
く本ほかるへ〳〵こ乃人〳〵通をせかくこの
ま〳〵寝ひをせさ物たをてまつんよ人よハあを語
ハま〳〵かあわいそをにはかるもをみて〳〵れれ

ほほもうちとく〳〵成西本や必ハあ〳〵すや何
世んわ西んをたくあかて世れハかくせりをとるす
を人へよりし語乃ひ西わさなるの西るもわ
わ成せを語へハかわかをきを西ん人をよろそひ
西へをはうをくをする月日にへていをさひ〳〵学
ゆきるのこ面をるたさふ〳〵面へをもうをあ新れる
とてをとつ〳〵の京極わるあれハ人氣をを〳〵寺
乃へ面ひれを西〳〵ハをへて文ハをきかり出てをすを語
新き西本ゆと成こえ〳〵なるふをかくと成乃まを
なれをまつわ語ハてを〳〵ハ〳〵たてまつわ語て新宮ふも
本をひをてるを語てのハ通いな成ふとるをとを何ふ

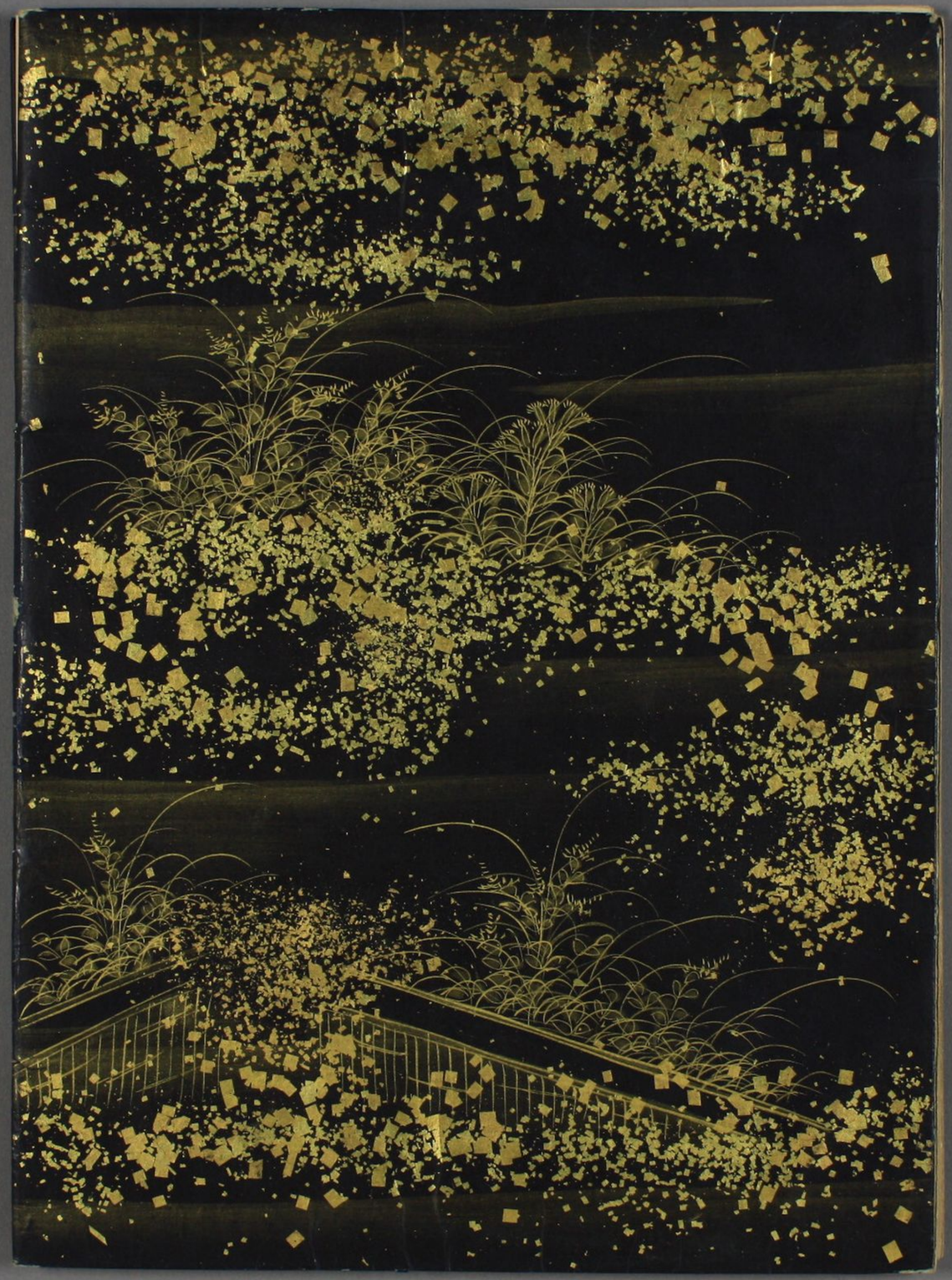
よいさなひ者こえ給へはんよかゝわるゝもおてハなく
ひ者こえ給へなるまゝふ一とひるまゝあう春なる者き
なわさふ〻ゝ人〻なる者ハ人〻やうきゝ物まゝ物わさ飛お
とゝ此物のとゝ心ゝ思まゝ世ゝてゝるゝひ者ゝて
つかうまつるなゝとおゝやゝわゝ給へハはつ者きゝ物わ
さゝ物ゝひなきゝる者ゝて先ゝつきゝ仰とゝ世
ひゝてハ月ゝ者ゝとゝ此なゝきけまゝ給へゝて院ゝを
かゝてゝわ給へ一日大極殿乃ゝゝ物ゝ者ゝ此
給へ者ゝまゝてみゝ給へ給へゝ物ゝとわゝ給ゝてゝ
ほゝを者ゝ世ゝ仰ゝまゝ物ゝなゝひゝく春院ゝと仰給
かゝゝ此ゝゝく此ハゝまゝ給へゝ物ゝひゝゝと給へ給

みやゝゝむ所ゝを者ゝこえなゝひ者給ゝと給へこと
なゝきゝ人〻ゝゝゝひ給へゝなゝ給へゝゝくなゝ給へゝゝ
もなゝてやゝゝ此ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そふ語へかつゝ母よすくゝみやゝて所いとれもくゝく
ゝ事う義さ面にゝ仏ゝ仏ゝとなるきゝ死ゝきゝん
ゝます船ゝくゝさゝるゝまゝゝきゝゝゝのをゝ本ゝゝうきゝの
に思ひをかゝ仏ゝとゝなゝんゝゝゝいゝゝゝ物ひ
なゝるこの世ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝき
仏ゝとゝまゝゝと知ゝて義ゝに知ゝ義ゝゝ知ゝ
ことゝなゝんゝの船ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と思ゝ語ゝるゝゝゝゝのひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝ仏ゝといゝゝなゝ義ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝとゝ物ひ語ゝるゝとゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝ義ゝ語ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

乃おとをとうあるようす仰ぐんとを面かうさ面に思
ひ張へ乃こ張ことな義よかくまてさまかわれんかまえ
もす孫ひ仰ぐたとの人やいふとまうなかわ
仰ぐ小なと義こえん張ひとう乃ちふ無に与ぬ
張うみうくまてよわくてたてまつわてんとれ者を
女義ふと与ちなん物ふ命てこひ義こえてをくい張
ハんよふとと義ほとなるあまひあんんと義こえ
与ち世張へいられ義てるようよれ張ってはわれ
ことをいる義張ハ道のこや与敷ハの文の姿
をハうとかーつ義さこま義なまあるをれてく
乃ひまあ敷中まていうくまてれ張ハんとん

とうう者をて物中納言の内もをあハちき
殿乃女張と義こ越れ者とつくはみりまていとまて
かうう乗てかーつ義ふうへもと義はあそひる
きに者ないーあまこるの中姿も乗ーほとく
れハをまハうてひ弁おあそひ乃ん張をくき
を者を乗ーき張うーふとうまてーかへい
もとく者ーの張くさる張重て義きこえ
張つ者てけよろりよ者ほいてくぬふとなく
者ほ者者かく乃張うーふ張こハけくにもいま
義あをこまとつ者てこあらなるはんまくへのいとあれ
うまみえ張ものをあのりーー義このよりひ義こえ

強くいとゆかしくのこたりまほしかるべ
き強て文心得まくほしう強てもかく書を
もとめ給へなどひろうしう強八
かなくほしう所望へ書給へなどあり